

## 教育環境適応尺度Ⅱの小学校4年生への 適用可能性検討

### Examination of Adjustment Scale for School Environment Ⅱ for fourth-grade students

小 泉 令 三<sup>1</sup>

(Reizo KOIZUMI)

第四部心理学科

(1995年9月11日受理)

Adjustment Scale for School Environment Ⅱ (ASE Ⅱ) was confirmed to be usable for fourth graders, based on the results of examination of validity (factor pattern and concurrent validity) and reliability (internal consistency and test-retest method) with the subjects of 112 fourth-grade students. The fourth graders in this study showed higher ASE Ⅱ scores than fifth through ninth graders in Koizumi (1995) and it was suggested that perceived quality of school life declines between fourth and fifth grades.

中学校入学前後の子どもの学校環境への適応状態を概観するために、小泉 (1995) は、小学5年生から中学3年生の各学年の児童・生徒を対象に、学校生活での適応感を横断的に検討した。その際に、教育環境適応尺度Ⅱ (Adjustment Scale for School Environment Ⅱ, 略して ASE Ⅱ) を作成し、妥当性、信頼性の検討を行った。ASE Ⅱは小泉 (1986) の教育環境適応尺度を改良したもので、5つの下位尺度 (合計18項目) から構成されている。本研究は、ASE Ⅱの適用学年をさらに広げるために、小学4年生での ASE Ⅱの妥当性および信頼性を検討することを目的としたものである。なお、この機会に、小学4年生の学校環境への適応感の水準を、小泉 (1995) の小学5年～中学3年のデータと比較することとした。

## 方 法

### 被調査者

2つの県の公立小学校1校ずつ、計2校の小学4年生112名 (男子60名, 女子52名) が被調査者であった。これらの2校は、小泉 (1995) で小学5年生から中学3年生の ASE Ⅱ得点を検討した

際に、小学5年生と6年生の両学年の被調査者を得ることができた学校である。これらの被調査者の中で、1クラス (36名) は、ASE Ⅱの妥当性と信頼性、および外的変数との関係を検討する際の被調査者としても参加した。

### 調査内容

#### (1) ASE Ⅱ

ASE Ⅱ (小泉, 1995) は、「対教師関係」(4項目)、「学習意欲」(4項目)、「自校への関心」(4項目)、「積極的級友関係」(級友関係 (正): 3項目)、「消極的級友関係」(級友関係 (負): 3項目)の5つの下位尺度 (合計18項目) から構成されている。調査実施段階では、これらの18項目以外に他の6項目を含んでいたが、小泉 (1995) での小学5年生から中学3年生の数値との比較を念頭に、以下の分析にはこれらの18項目を用いた。回答は、「よくあります」、「ときどきあります」、「あまりありません」、「ほとんどありません」の4段階で求め、順に4-1点を与えた。

#### (2) 学級診断適応検査 (SMT)

「学校への関心」、「級友との関係」、「学習への意欲」、「教師への態度」、「家族関係の認知」の5つの下位尺度から成る尺度 (学校モラル研究会,

<sup>1</sup>本研究の実施にあたっては、平木敦子氏の多大なる御協力を得ました。心より感謝いたします。

1984)で、各下位尺度は15項目ずつから構成され、回答は「はい」、「?」、「いいえ」の3件法で求めた。高得点ほど適応的となるように、順に1, 0, -1とし、下位尺度ごとの合計得点を算出した。

### (3) 担任教師による適応度評定

担任教師から見た各児童の適応度について、対教師関係、学習意欲、自校への関心、級友関係の各領域ごとに、高得点ほど適応的となるように1

表1 教育環境適応尺度Ⅱ (ASEⅡ) の因子分析結果

| 因子と項目                                  | F1        | F2         | F3        | F4         | F5        | 平均   | SD  | $h^2$ |
|--|-----------|------------|-----------|------------|-----------|------|-----|-------|
| I 対教師関係 (46.6%)                        |           |            |           |            |           |      |     |       |
| 11 先生に、何でも話しかけたり、たずねてみたいなと思うことがありますか   | 03        | 19         | 07        | <u>40</u>  | 27        | 2.78 | .86 | .31   |
| 3 先生は、自分たちの気持ちをわかろうとしていと感じることがありますか    | -22       | <u>54</u>  | 12        | 00         | 00        | 3.23 | .88 | .50   |
| 15* 先生の言っていることは、まちがっていると思うことがありますか     | <u>88</u> | 15         | -04       | 16         | 09        | 1.60 | .92 | .69   |
| 7* 先生とは、できるだけしゃべりたくないと思うことがありますか       | <u>56</u> | -19        | 03        | 04         | 05        | 1.63 | .86 | .45   |
| II 学習意欲 (59.8%)                        |           |            |           |            |           |      |     |       |
| 9 いっしょうけんめい勉強することがありますか                | 03        | <u>61</u>  | -15       | 04         | 24        | 3.29 | .76 | .47   |
| 17 テストのための勉強をしっかりとやっていくことがありますか        | 02        | <u>75</u>  | -00       | 10         | -14       | 2.97 | .83 | .57   |
| 1 学校での勉強が楽しいと感じるときがありますか               | 10        | <u>75</u>  | 19        | -03        | -05       | 3.38 | .81 | .57   |
| 21* 授業中にぼんやりして、別のことを考えていることがありますか      | -00       | <u>-76</u> | 34        | 05         | 07        | 2.41 | .93 | .60   |
| III 自校への関心 (38.4%)                     |           |            |           |            |           |      |     |       |
| 8 私の学校はすばらしい学校だと思うことがありますか             | 16        | -08        | 02        | <u>63</u>  | -10       | 2.71 | .88 | .41   |
| 24 私の学校は、町の人からよく思われていると感じることがありますか     | -14       | 10         | <u>54</u> | 16         | 17        | 2.76 | .91 | .44   |
| 4* 私の学校には、気に入らないことがいっぱいあると感じることがありますか  | 02        | 18         | <u>39</u> | <u>-48</u> | 21        | 2.25 | .93 | .51   |
| 20* 自分の学校のことを悪く言われて、そのとおりだと思うことがありますか  | 08        | -12        | 05        | -06        | <u>57</u> | 1.47 | .75 | .36   |
| IV 級友関係(正) (48.9%)                     |           |            |           |            |           |      |     |       |
| 14 クラスの人と話していて、楽しいと感じることがありますか         | -16       | 10         | 13        | 24         | -04       | 3.70 | .57 | .16   |
| 6 クラスの中には、いい友だちがいっぱいてよかったと思うことがありますか   | -12       | 17         | 21        | <u>39</u>  | -16       | 3.63 | .62 | .34   |
| 22 クラスの人といっしょに遊んだり、電話で話したりすることがありますか   | -03       | 19         | 07        | <u>42</u>  | 07        | 3.40 | .83 | .28   |
| V 級友関係(負) (50.0%)                      |           |            |           |            |           |      |     |       |
| 2 クラスの人について、「いやだ」、「気に入らない」と思うことがありますか  | <u>38</u> | <u>-43</u> | 01        | -04        | 13        | 2.08 | .97 | .51   |
| 18 自分は、クラスの人からあまりよく思われていないと感じることがありますか | 13        | -26        | <u>55</u> | 08         | -10       | 2.23 | .96 | .38   |
| 10 クラスの人と、あまり話したくないと思うことがありますか         | <u>56</u> | 04         | 15        | -31        | -17       | 1.79 | .88 | .50   |
| 他の因子を排除した分散                            | 1.35      | 2.11       | 1.02      | 1.30       | 0.65      |      |     |       |

(注) 因子負荷量の小数点は省略。\*は逆転項目。( )内は、下位尺度ごとの主成分分析の第1成分の分散寄与率を表す。下線は、絶対値が.35以上の因子負荷量を表す。

—5の5段階で個人ごとに評定を求めた。

#### (4) 学業成績

3学期に実施された、小テストなどを除くすべての試験の中で、国語、社会、算数、理科の4教科についての試験の素点を入手した。各児童ごとに、4教科の素点の合計点を出し、学業成績の指標とした。

#### 調査時期および手続

小泉(1995)の調査時期と同一年度である1993年の1月下旬から2月下旬にかけて、学級単位で学級担任がASEⅡの質問項目を読み上げながら、回答を求めた。被調査者の中で、1クラス(36名)の児童については、ASEⅡを約3週間後に再度実施し、またこの際に同時にSMTにも回答を求めた。さらに、これらの被調査者については、担任教師による適応度評定と学業成績を入手した。

## 結 果

#### ASEⅡの妥当性・信頼性および行動的側面との関係

因子構造を検討するために、18項目に対する回答をもとに、主因子法による因子分析を行った。

固有値は、第1因子から順に4.55, 1.84, 1.71, 1.49, 1.14, 0.93, 0.86, 0.79,...となり、第5因子と第6因子の間に比較的大きな開きがあることから、5因子解を採用した。表1は、プロマックス回転後の因子負荷量を示したものである。学習意欲の下位尺度にはまとまりが見られるが、その他の部分については、下位尺度にしたがった因子構造にはなっていないことがわかる。具体的にいうと、第1因子は、教師および級友との消極的關係に関する項目に負荷量が高かった。第2因子は、学習意欲に関する項目の負荷量が高いが、一部、教師や級友関係に関する項目も含まれていた。第4因子では、自校への関心と級友との積極的關係に関する項目が交じっていた。

各下位尺度の項目のまとまりを検討するために、下位尺度ごとに主成分分析を行い、第1成分の分散寄与率を表1に示した。学習意欲の尺度が一番寄与率が高く、逆に自校への関心は4割以下となっていた。

表1の逆転項目については、得点を逆転させた上で、下位尺度ごとに1項目あたりの平均得点を算出し、下位尺度得点とした。各下位尺度、および合計点(消極的級友関係については、逆転して加算)の尺度間相関係数を表2に示した。自校への関心の尺度は、他の下位尺度および合計得点

表2 下位尺度間の相関

|            | I    | II   | III  | IV   | V    |
|------------|------|------|------|------|------|
| I 対教師関係    |      |      |      |      |      |
| II 学習意欲    | .50  |      |      |      |      |
| III 自校への関心 | .13  | .08  |      |      |      |
| IV 級友関係(正) | .39  | .35  | .37  |      |      |
| V 級友関係(負)  | -.53 | -.52 | -.17 | -.32 |      |
| 合計得点       | .77  | .75  | .45  | .67  | -.78 |

(注)  $N=112$

表3 信頼性、妥当性に関する分析結果、および行動的側面に関する諸測定との相関係数

|            | $\alpha$ 係数 | 再検査    | SMT     | 担任教師評定 | 学業成績  |
|------------|-------------|--------|---------|--------|-------|
| I 対教師関係    | .59         | .68*** | .64***  | .39*   | .18   |
| II 学習意欲    | .77         | .76*** | .71***  | .34*   | .33*  |
| III 自校への関心 | .23         | .48**  | .53***  | -.04   | -.35* |
| IV 級友関係(正) | .46         | .59*** | .63***  | -.05   | -.15  |
| V 級友関係(負)  | .49         | .53*** | -.56*** | -.08   | -.07  |
| 合計得点       | .79         | .80*** | .73***  | .25    | .07   |
| (人数)       | (218)       | (36)   | (36)    | (36)   | (36)  |

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$

表4 下位尺度得点の平均値と標準偏差

|            | 男子          | 女子          |
|------------|-------------|-------------|
| I 対教師関係    | 3.01(0.61)  | 3.40(0.49)  |
| II 学習意欲    | 3.07(0.64)  | 3.04(0.65)  |
| III 自校への関心 | 2.86(0.51)  | 3.03(0.43)  |
| IV 級友関係(正) | 3.55(0.50)  | 3.61(0.44)  |
| V 級友関係(負)  | 2.07(0.62)  | 1.99(0.71)  |
| 合計得点       | 15.42(1.93) | 16.09(2.00) |

( ) 内は標準偏差

よりも相関係数が低くなる傾向にあった。

SMT との併存的妥当性検討については、ASE II の5つの下位尺度に、順に SMT の「教師への態度」、「学習への意欲」、「学校への関心」、「級友との関係」(級友関係(正)、級友関係(負)の両方)を対応づけた。その結果を表3に示した。いずれの下位尺度および合計得点についても、期待どおりの方向の相関関係を確認できた。

信頼性の検討に関して、内部一貫性を表す $\alpha$ 係数および再検査係数を表3に示した。自校への関心、積極的・消極的級友関係の下位尺度の $\alpha$ 係数が低目なのは、下位尺度と因子構造が完全に一致していないことが影響しているものと考えられる。

行動的側面に関して、担任教師による適応度評定および学業成績との相関係数を、表3に示した。それぞれ、一部の下位尺度との間に有意な相関係数を示した。

#### 適応感(下位尺度得点)の検討

表4に、男女ごとの下位尺度得点および合計点の平均値と標準偏差を示した。ここで、小学4年生～中学3年生の適応感を概観するために、小泉(1995)の小学5年生～中学3年生の平均得点・標準偏差を合わせて用い、下位尺度ごとおよび合計得点の分散分析(学年×性)を行った。表5はその結果を表したものである。すべての下位尺度と合計得点で学年の主効果が有意であり、また対教師関係では学年×性の交互作用が有意であった。学年ごとの各下位尺度得点と合計得点の平均値を図1と図2に示した。Newman-Keuls 法による多重比較の結果、対教師関係では、小学5と6年、そして中学1と2年の間を除くすべての学年間で差が有意であった。学習意欲については、4年生が他のどの学年よりも高得点であった。自校への関心では、小学5年と6年、そして中学1年と3年の間を除くすべての学年間で有意な差が認めら

表5 分散分析結果

|            | 学年       | 性       | 学年×性    |
|------------|----------|---------|---------|
| I 対教師関係    | 43.29*** | 0.21    | 4.39*** |
| II 学習意欲    | 19.50*** | 1.18    | 1.64    |
| III 自校への関心 | 30.00*** | 0.38    | 1.16    |
| IV 級友関係(正) | 2.70*    | 1.45    | 0.90    |
| V 級友関係(負)  | 7.49***  | 2.79    | 1.73    |
| 合計得点       | 34.12*** | 0.74    | 1.40    |
| (df)       | (5/679)  | (1/679) | (5/679) |

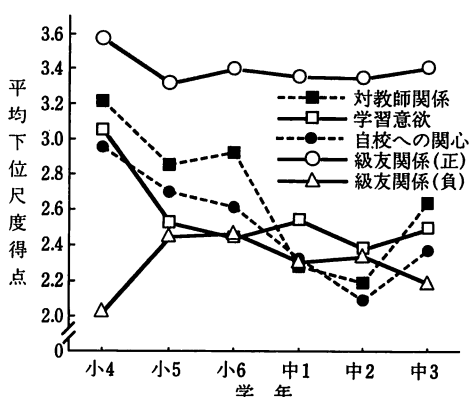
\* $p < .05$  \*\*\* $p < .001$ 

図1 学年・下位尺度ごとの平均下位尺度得点  
(注) 小4以外の数値は、小泉(1995)より引用

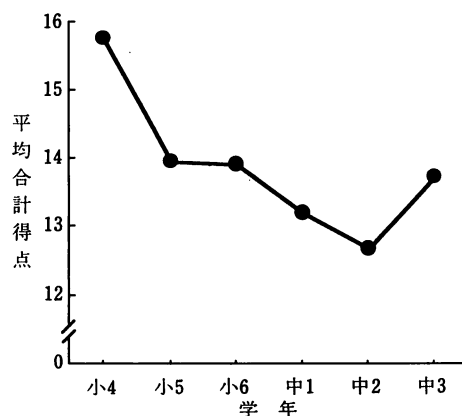


図2 学年ごとの平均合計得点  
(注) 小4以外の数値は、小泉(1995)より引用

れた。積極的級友関係では、小学4年が小学5年、中学1・2・3年よりも得点が高かった。消極的級友関係では、小学4年が中学3年を除くすべての学年に比べ低得点で、また中学3年が小学5・

6年よりも得点が低かった。

合計得点については、小学5・6年、中学3年の3学年間では差が見られず、他の学年間では差が有意であった。対教師関係の学年×性の交互作用では、小学4年で女子が高得点であったが、中学1年では男子が高得点であった。

## 考 察

本研究の目的は、教育環境適応尺度Ⅱ(ASEⅡ)の小学4年生での適用可能性を検討することであった。その結果、類似尺度との比較による併存的妥当性、内部一貫性および再検査法による信頼性が満足できる水準にあることが確認できた。因子構造については、下位尺度の構造と一致しない部分が見出されたものの、主成分分析による検討から、当初より設定してある下位尺度での使用は可能であると考えられた。これらの結果から、ASEⅡの小学4年生での適用は可能であるといえよう。

ここで、因子構造について見てみると、自校への関心の下位尺度は、第1成分の寄与率が低い。これは小学校4年生段階では、他校との比較あるいは地域社会での評価に基づくような、相対化された形での自校への関心が明確には形成されていないことを意味しているのかもしれない。また、教師関係と級友関係の項目に同時に高く負荷している因子がいくつかある(F1, F2, F4)ことから、教師関係と級友関係はまだ十分には分化していない可能性もある。

一般に、ある事項に関する発達の検討を行う際に、そこで用いる指標の意味や構造が各発達段階で質的に異なるために、単純な形で量的な比較ができないことがある。本研究のASEⅡの因子構造の場合にも、その傾向があるが、しかし他の妥当性・信頼性に関する検討事項では大きな問題点は見当たらず、同一下位尺度での学年間の比較は可能であると考えられる。

なお、行動的側面に関する測度との関係では、担任教師による適応度評定とは、対教師関係と学習意欲が、そして学業成績とは学習意欲がそれぞれ正の相関を示した。予想外の結果は、学業成績が自校への関心と負の相関を示したことである。子どもが感じている適応状態と、行動的な側面での変数との関係は、必ずしも一致していないことがあるが、特に小学4年生段階では、その点で解釈上の注意と今後の検討が必要と考えられる。

次に、小泉(1995)での上級学年の測定値と比較を行った結果からは、4年生ではその適応感の高さが特徴的であるといえる。田中(1975)は、友人選択の要因について、小学4年生と5年生の間で、相互的接近(例;住居や席が近い)の重要性が大きく減少し、逆に尊敬共鳴(例;尊敬できる、考え方が一致している)の重要性が増加することを示している。これは、この2つの学年間に、交友関係に関して質的に大きな相違があることを意味している。本研究での結果は、適応感についても4年生と5年生の間に一つの区切りがあり、この時期に学校生活の捉え方が大きく変化することを示唆していると言える。これに関しては、さらに小学3年生も含めて検討を進める必要があろう。

性差に関して、対教師関係で、小学4年では女子が男子より高得点で適応的であるが、中学1年では逆に、男子が高得点となっていた。これは、この期間の女子の指導の難しさを表す資料の一つと言える。

なお、本研究の被調査者は、小泉(1995)と同じ学校の児童であり、他学年との比較という点では、学校間の違いによる得点変動を小さくできた。しかし、全体として被調査者があまり多くはなく、この点は本研究の限界と言える。

以上、本研究の結果をまとめると、(1)小学4年生でのASEⅡの適用可能性を確認することができ、また(2)小学4年生と5年生の間で、適応感に下降が見られ、学校生活のとらえ方が大きく変化することが示唆された。

## 引 用 文 献

- 学校モラル研究会 1984 改訂学級適応診断検査 日本文化科学社  
小泉令三 1986 転校児童の新しい学校への適応過程 教育心理学研究, 34, 289-296.  
小泉令三 1995 小学校高学年から中学校における学校適応感の横断的検討 福岡教育大学紀要, 44(4), 295-303.  
田中熊次郎 1975 新訂児童集団心理学 明治図書